

学校運営協議会 地域就労・生活連係部会 会議録

開催日時	令和5年10月2日（木）10:40～11:50	
会場	本校会議室	
出席者数	学校運営協議会委員 3名	学校 2名
出席者氏名	委員E（今金町商工会女性部 部長） 委員F（今金町農業協同組合 青年部顧問） 委員G（寒昇町内会 会長）	・教務部長 山本 拓郎 ・進路指導部長 田中 博昭

記録

＜協議の柱＞

- （１）本校における進路指導、卒後指導の部分を共有し、今金町との関わりの中で本校卒業後今金町に就労していくための今後の体制整備について（就労支援事業、i・スマイル、新事業、その他）
- ・田中教諭よりパワーポイント資料説明。

- （２）在籍中に付けておかなければいけない力、求められる人材について

○事務局員

「令和5年度卒業予定者 15 名、昨年度からは半減。15 名のうち 14 名は進路が決定しつつあるが、窯業科の女子 1 名については、なかなか登校が難しく、保護者からも進路のことがプレッシャーになっていけいないので、進路については急いで決めなくてもいいということになっている。函館市内にどんな事業所があるのかを知ってもらうために、見学はハードルが高いが、事業所が行っているイベントに参加してもらうなど、工夫している。町内の生徒については、男子 2 名、女子 1 名在籍している。そのうち、男子 2 名はせたな町の事業所、女子は光の里のワークショップで実習を行い、就労予定。卒業後は自宅から通所の予定。卒業予定者の中で、12 名が自宅から通勤、残り 3 名が GH を利用する予定。昨年度卒業生で 3 名が離職。離職理由は、進学や就職の目的が本人の中で固まっていなかったこと、障害受容と自己理解が浅かったことである。3 名のうち 2 名は再通所、残り 1 名はコンビニエンスストアでアルバイトをしている。」

「生徒の良さを軸にして、課題を伸ばす指導を意識して取り組んできた。本校の生徒は気持ちが弱い生徒が多いため、自己肯定感を高めて、課題を乗り越え、達成感を感じさせ、長期就労につなげていくことを意識して指導をしている。進路決定までの流れとしては、見学を行い、個別実習を 1 週間程度、前提実習は福祉事業所が 2 週間、一般企業が 5 週間ということになっている。今後は、実際に社会に出て働く前に、短期間で終軸の実習を必要に応じて行っていく。また、生徒の生活実態や作業能力などの学校の様子を事業所に対して細かく情報提供をしている。そのうえで、本校に在籍する 3 年間で障害受容や自己理解を進めるのは難しい。生徒や保護者は「やりたいこと」と「できること」の理解ができていないケースが多い。また、保護者も難しくなっているケースが増えてきた。保護者が生徒を困らせてしまい、生徒が失敗すると学校のせいにする。学校としては、失敗をとおして学び、精神面でもそれを乗り越える力を身に付けさせたい。また、社会的な問題にもなるが、就労先の障害理解が進んでいない。具体的には、窓口の担当者は障害についてある程度理解しているが、実際に一緒に仕事をする人が障害理解できていないケースがある。どう接したらいいかわからずに、「どうしてこんなこともできないんだ！」というような言葉を掛けてしまい、最終的には卒業生の気持ちが折れてしまう。一般就労した卒業生に対してジョブコーチをつけることもあるが、あくまで、障害者に対する支援が主な業務であり、一緒に働く人に対してアドバイスをするわけではない（が、ジョブコーチ本人の判断で、助言をするケースもある）。」

「家庭環境の貧困も多くなり、愛着障害と言われる子供がいたり、教育環境の変化からいじめにあったりと歪んだ防衛本能が働き、障害への抵抗感をもってしまい自己肯定感が低くなったまま本校に進学して、社会に出ていこうとしている。就職や就労に向けて、生徒の自己理解と障害理解をどのように働きかけていけばいいか、アイデアをいただいて、今後の進路指導に役立てていきたい。」

「生徒が卒業後に今金町に残りたいと言っているが、GH がなかったり、アパートも満室が多く、家賃が高かったりなどの理由から今金に残ることが難しくなっている。」

○委員G

「住むところは、各家庭で対応するのは難しいので、施設や空き家にアドバイザーを付けて住んでもらうしかない」

○事務局員

「学校でも、寄宿舎女子棟では人数が少ないので、3 年生は GH のように一人一部屋使うようにして、疑似的に環境を作っている。地域で生活をするときに、できるだけ自分でできることが多くなるように指導をしている。」

○委員E

「光の里でGHをやっているが、世話人さんの人材不足で施設を運営できなくなっているという話は聞いている。アパートに住みたいという生徒がいても、現状では難しい。なんとか、一軒家をリフォームして生活ができるようなシステムを作ること。世話人については、1人でやるのは難しいので、どこかの団体が協力してやるなど、地域全体で考えていかなければ個人に負担がかかってしまう。例えば、商工会の女性部に食事だけを作ってもらうなどはシステムが整えば可能になるかもしれない。町としてシステムを整える必要がある。食事を作ればいいだけの仕事ではないので、負担が大きく、なり手がいないという話を聞いている。」

○事務局員

「光の里の世話人募集は、勤務時間の関係でなかなか人手が決まらないと思っている。午前・午後で分業するなど時間や業務内容を分業化することで、負担軽減につながるのではないかな。」

○委員E

「子ども達に対する就労支援協議会があるが、卒業生を受け入れるにあたり、個人では支援が難しいことも、会議で他の支援者からの情報を聞いて参考になり、安心できた。自分が卒業生を受け入れたときは、自分の子どもだと思ってしつけ直せばいいと思っていたが、実際はそうではなかった。卒業生をフォローするシステムも町全体で取り組んでいかなければならないと思っている。」

○事務局員

「農福連携の部分では、農家も繁忙期は人手不足で畑の維持管理が難しくなっていると新聞記事にも掲載されていた。実際の農家の生活は生徒が想像しているものと大きくかけ離れていると思うが、繁忙期に限ってはGHではなく、農家に住まわせてもらって仕事と生活を共にすることで、生徒の学びにつながり、農家の仕事への興味が高まっていくのではないかな。農協や青年部で仕事と生活の場を提供していただくことはできないものかな？」

○委員F

「農家側の障害者に対する理解が圧倒的に浅いため、障害者を雇用する概念がほとんどないのが現状。実習を受け入れている農家は、ある程度の理解があって受け入れているが、ハウスの中の単純作業など、危険が伴わない仕事しかさせていない。また、季節によっては仕事があつたりなかったりする。自分の命をきちんと大切にできる生徒や卒業生であれば、ハウス以外の仕事も任せられると思うが、とにかく雇う側の理解が浅いと感じている。このような場が設定されているから、意見を言いやすい。システムが構築されればいい方向に向かっていくと思う。自分のところも、時期によっては人が欲しいと思うこともあり、実際に来てくれるということになれば非常にありがたいが、そこまでのハードルが高い。」

○事務局員

「今後学校として、職業的自立と生活の自立のレベルを上げていくような指導が必要になってくる。例年、3年生でミニトマトの箱折りをやっている。コスト意識を学ばせたり、農家さんの役に立っているということを生徒に伝えたりして、やりがいを感じさせることで、働く場が見えてくるのではないかな。そのためには、学校としては情報を発信していく必要がある。」

○委員E

「青年部でイベントをやるときに、生徒にも手伝ってもらったことがあった。その時には生徒たちは楽しそうに働いていた。経験することによって地域の人とのかかわりが増え、生徒の様子を知ってもらえる。」

○事務局員

「寄宿舎の買い物で実習でお世話になった農家さんから声を掛けてもらったり、マラソン大会で応援してもらえたりすると、生徒の励みになる。接点をなるべく多く作ることがいいのではないかな。」
「障害理解や自己理解は親の立場から、どのように進めたらいいかな？」

○委員E

「最初の頃の教頭に、入学した時点で障害があることを認識させていることや自分に何が足りないのかを教えていると伝えられた。それぞれが得意な部分もあるので、それを3年間で見つけられたらいい。」

○事務局員

「自分の娘も中学校3年間今金町でお世話になって、今夏行われたミュージックサマースクールに参加し、たくさんの町民の方に声を掛けてもらった。町民の方は皆さん、厳しい言葉を掛けたり、褒めたりして受け入れてくれ

る。それが、町としてとても魅力である。」

○委員G

「たとえ、数年で町から出て行ってしまったとしても、今金の良さが頭に残っていれば、いずれは町に戻ってきて、定住したり、定住しなくても観光に来たりしてもらえれば、町の経済活動に貢献してもらえる。」

○委員E

「自分のところで働いていた卒業生が辞めると言ったときには、辞めるのは構わないが今金町で次の仕事を探すように伝えた。町に残れば、色々な人に支えてもらえるが、都会に出たら通用しないかもしれない。何かあれば、つながりがあるから戻ってくればいいと伝えた。」

○事務局員

「卒業生の中にも、巡り巡って今金に戻ってくる卒業生もいる。卒業生が戻ってきたいと思える魅力がある町だと思うので、町民の皆さんとお付き合いができるといい。」

○委員E

「部活動など、課外授業でも地域の人と一緒にできるようなことがあれば、もっと地域とつながることができる。就労した後の趣味の部分が心配で高校生のうちから、つながりが持てていればいいと以前から感じている。」

○委員G

「仕事も大切だが、趣味の部分で仲間ができればそれが力になることもあるのではないか。そういった意味では、システムの構築がやはり大事になってくる。」

○事務局員

「町のイベントに参加し、町民の方々から生徒に対していろいろなことを伝えてもらうことで、生徒も我慢する力が身に付いてくると感じる。」

○委員G

「趣味に結びつく要素があることが大きなウェイトを占めていると感じている。趣味や能力を引き出すことが課題である。」

○委員F

「失敗をして許される環境ではなかったかもしれないが、自分たちにもできないことがある。失敗してできるようになることもあるから、そこを肯定するところから始める。一度失敗をしても次に失敗しないようにすればいい。失敗をしてもいいという気持ちをもたせることが大事。」

○委員G

「高卒で就職しても、大卒で就職してもみんな失敗はあって、経験してくものである。『失敗』ということに対して周りが過敏になりすぎている気がする。」

○委員E

「一生懸命やって失敗をしたら、次はどうしようかと考えられる。一生懸命といい加減は違うので、その違いを教えてあげる必要はある。」

○事務局員

「生徒たちは怒られて終わりではなく、その後にどう直すかが収入増につながっていく。稼げる人材になるためには、課題も含めて自分にとって嫌なことを言ってくれる人を大事にしてほしい。」